Akita University

秋　田　大　学
教養基礎教育研究年報
75 － 81　（2017）

「道徳の時間」に対する教師の意識
― 中学校教師へのインタビュー調査から ―

井　陽　介・鈴　木　翔

Teachers Attitudes Toward Moral Education Based on Interviews with Junior High School Teachers

Yousuke I　Sho SUZUKI

１．問題の所在

平成 27 年 3 月 27 日，学校教育法施行規則一部改正により,「道徳の時間」は「特別の教科　道徳」（以下,「道徳科」とする）に位置付けられることとなった。教師にとっては，検定教科書や評価が導入されることで，指導方法の改善等を通して，子供の道徳性をさらに高めていくことが期待されている。

しかし，中央教育審議会（2014）の「道徳に係る教育課程の改善等について」（答申）によれば,「道徳教育の要である道徳の時間において，その特質を生かした授業が行われていない場合があることや，発達の段階が上がるにつれ，授業に対する児童生徒の受け止めがよくない状況にあること，学校や教員によって指導の格差が大きいことなど多くの課題が指摘されており，全体としては，いまだ不十分な状況にある」とされ,「道徳の時間」に対する課題が山積されている状況にあることがうかがえる。それらの課題の中でも「道徳の時間」に対する教師の意識の問題がこれまで度々課題として挙げられてきた。

例えば，東京学芸大学総合的道徳教育プログラム推進本部（2014）が実施した「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査－道徳の時間への取組を中心として－」において,「『道徳の時間』を広く小学校または中学校の教育全体を見たとき，どう思うか」について教師に尋ねたところ，中学校（一般校）教師の回答では,「十分に行われていると思う」（26.1％),「十分に行われていないと思う」（73.8％),「無回答」（0.1％）となっており，その「十分に行われていないと考える理由」として,「忙しくて他の指導に時間をとられがちである」（49.7％),「指導の仕方が難しい」（39.1％）といったことが，中学校（一般校）教師の上位の回答として挙げられている。この調査でわかるとおり，多くの教師が「道徳の時間」に対する取り組みに苦慮しており，その背景には，道徳の時間に対する意識のあり方に課題を抱えていることが推察できる。

横山（2016）が「これまで道徳の授業が苦手な先生方が多い根本的な理由の解明が不十分であったため，道徳科になったとしても道徳教育の充実につながるか心配である」と指摘するように，これまでにも「道徳の時間」に対して教師が苦手意識を持っていることや軽視傾向にあること，そして忌避感情があることなどが指摘されてきたが，その具体的な理由やどのような理由からそうした意識が形成されるのかが十分に明らかにされてきたとは言い難い。

そこで本稿では，教師の「道徳の時間」に対する意識の現状を明らかにすることを通して，教師の道徳教育に関する支援等の解決策の糸口を検討していくことを目的として分析を行うこととする。

２．先行研究の課題と本研究の目的

前述したとおり，これまでの道徳教育に関する各種調査結果では,「道徳の時間」に対して教師の軽視意識が指摘されてきた。そして，このような状況を改善するため，多くの「道徳の時間」に対する授業実践の研究が蓄積されてきており，

Akita University

様々なアプローチから「道徳の時間」に対する意識の改善が行われてきた様相がうかがえる。

しかし，先行研究においては，多くの場合，前述した東京学芸大学等の「道徳の時間」に対する教師の意識調査等をはじめとした各種調査結果を引用し，教師の意識の低さを指摘するに留まっている場合が多く，その具体的な理由を調査した研究は非常に少ないのが現状である。そのため，「道徳の時間」に対して教師の意識が低い詳細な原因については，これまでほとんど着目されてこなかった。また同様に「道徳の時間」に対する苦手意識や忌避感情についても指摘されることはあっても，その実態については必ずしも十分には明らかにされてこなかったという経緯がある。

このような状況の中で「道徳の時間」に対する教師の意識に焦点を当て，特に教師の軽視意識，忌避感情を調査した研究に田沼（2015）がある。田沼は，道徳教育軽視傾向の主因として，制度化された学歴社会を生きてきた教師が主知主義を前提にしており，またそのことが教師の強固なビリーフになっており，容易く揺るがないことにその困難さを挙げている。また忌避感情については，文字通り，道徳教育を意図的に回避する感情とし，大別すると①修身科の復活阻止といったイデオロギーを背景とした社会観に根ざした忌避感情，②国家規模で画一的に実施されることに抗する個人的な感情としての忌避感情，③道徳授業への理解不足や指導力不足から生じる忌避感情があるとしている。また，このように大別されるもののそれらが複合的に関連し合って忌避感情の再生産が繰り返されてきたと指摘している。「道徳の時間」に対する教師の軽視意識や忌避感情について詳細な検討をしている田沼の研究は，「道徳の時間」に対する教師の意識を改善していくための具体的な知見を与えている。

しかし，「道徳の時間」が特設され，今日に至るまで依然教師の意識が問題になっていることを考えれば，これまでとは異なった調査方法で「道徳の時間」に対する教師の意識の現状を詳細に検討することも必要である。例えば，「道徳の時間」に対する教師の苦手意識として，度々「指導の仕方が難しい」という回答が見られるが，単にその回答結果に留まるだけではなく，どのようなところに指導の仕方が難しいと考えているのかといった詳細な原因を明らかにしていく必要がある。そのため，これまで教師の意識の現状を明らかにするために量的調査が多く用いられてきたが，質的研究からもその要因を検討していき，教師の「道徳の時間」に対する意識の現状を詳細に明らかにしていくことが求められる。

吉澤（2104）は，「『道徳の時間』や道徳授業についての様々な研究の調査や報告書の多くが量的調査によるものであり，教師を取り巻く様々な要因の中で，彼らが道徳の時間に対してどのような意識をもち，そしてどのように実践するのかという，教師目線からのアプローチがほとんどみられない」と述べている。そして吉澤は，「道徳の時間」に対して意欲的な意識をもっている中学校教師に着目し，彼らがどのようにして道徳の時間に対して意欲的な意識をもつようになっていくのかについて，インタビュー調査を通してそのプロセスを明らかにしている。このように質的調査を通して，「道徳の時間」に対する教師の意識を詳細に検討していくことは，具体的な改善策を提示するために重要であると考えられる。

吉澤の研究では，その調査対象を「道徳の時間」に対して意欲的な教師に限定しているが，東京学芸大学の調査からも分かるように，多くの教師が「道徳の時間」への意識が低い可能性があるという現状に鑑みるならば，調査対象を「道徳の時間」に意欲的な意識を持っている教師だけに留めることよりも，むしろ調査対象を広範囲に広げていくことで，さらに具体的な教師の「道徳の時間」に対する意識の現状を可視化でき，それを解き明かすことによって，道徳教育の充実に貢献しうると考えることができる。その可視化された現状から「道徳の時間」に対する教師の意識の改善を図っていくことが可能となるからである。

これらの問題意識を背景として，本稿では教師が「道徳の時間」に対してどのような意識を持っており，その根底にはいかなる理由があるのかをあらためて明らかにすることを目的とする。とりわけ，教師が「道徳の時間」に対して，「苦手意識」や「軽視意識」，「忌避感情」を抱いているとするならば，それは具体的にはどのような理由によるものなのかを探索的に検討していくことにしたい。

Akita University

３．調査の方法

Ｘ県Ｙ市立Ｚ中学校の教師４名を対象に個別に半構造化面接を実施した。インタビュー協力者の属性は，表１の通りである。調査は2016年６月に実施し，面接時間は一人につきおよそ30分～１時間弱であった。

表１　インタビュー協力者の属性

協力者	性別・年代・教職経験年数
A	男性・20代・４年
B	女性・30代・９年
C	女性・20代・２年
D	男性・30代・10年

インタビュー協力者には，調査の趣旨および匿名性を保持した上でインタビューを録音することを十分に説明して協力の同意を得た。

面接では，「道徳の時間」に対する意識や取り組みの状況について自由に話してもらう中で，表２の１～４の質問項目については，すべてのインタビュー協力者に回答してもらった。また教師の意識や取り組み方について，興味深い点があった場合は，適宜筆者から質問を加えた。

表２　質問項目

質問１：「道徳の時間」に対してどのような苦手意識があるか
質問２：「道徳の時間」に対してどのような軽視意識があるか
質問３：「道徳の時間」に対してどのような忌避感情があるか
質問４：「道徳の時間」を充実させるためにどのようなことが大切と考えるか

そして面接後，逐語録を作成し，各質問の回答をその類似性に基づいて分類・整理した。

４．分析結果

４－１．「道徳の時間」に対する苦手意識について

質問１（「道徳の時間」に対してどのような苦手意識があるか）への回答の分類を示したのが表３である。

表３　「『道徳の時間』に対してどのような苦手意識があるか（質問１）」の回答の分類

回答者	内容
A・B・C	話し合いを導きたい方向に持っていけない
A・B・D	教材の内容が生徒に深く考えさせられる内容になっていないため良い授業にならない
A・C・D	生徒が授業に真剣に取り組まない

「話し合いを導きたい方向に持っていけない」とした具体的な回答では，*「どうしても話し合いが上手く進まないというか，（中略）上手く意見が分かれないとか，ディスカッションにならない，全員同じ意見だったりした時に，なかなか話が進まなくて困ったなというのがあります」*等があった。

「教材の内容が生徒に深く考えさせられる内容になっていないため良い授業にならない」とした具体的な回答では，*「（教材を）全部最後まで読んでしまえば，大抵の主人公は改善して，良いところも見つかるような行動をとっているので，『まあ，そこは悪かったけれども，別に最後頑張ったからいいんじゃない』というところに簡単に落ち着いてしまうような教材がわりと多いところもあって，そこを上手く，そういう教材であっても上手く活発に意見が飛び交うようなものに持っていける，そこはスキルの問題だと思うんですけれども，自分自身でそこのところでなかなか上手くいかない時も多いので，そういった意味から苦手という意識がありますね」*等があった。

「生徒が授業に真剣に取り組まない」とした具体的な回答では，*「成績に入らないからそんなに真剣にやらなくてもいいやっていう部分があって，なかなか子供たちが乗ってくれない部分があった」*や*「執拗にほかの人の意見に悪態をつくではないですが，そういう意見が出たりすることもありますし，そもそも集中できなくて，静めるのでいっぱいいっぱいで50分が終わってしまったりする」*等があった。

４－２．「道徳の時間」に対する軽視意識について

次に質問２（「道徳の時間」に対してどのような軽視意識があるか）への回答の分類を示したのが表４である。

Akita University

表４　「『道徳の時間』に対してどのような軽視意識があるか（質問２）」の回答の分類

回答者	内容
A・B・C・D	道徳の取り組みが他の教科・業務よりも優先順位が低い
A・B	道徳の時間が必ずしも道徳性を養うのに効果的とは思わない

「道徳の取り組みが他の教科・業務よりも優先順位が低い」とした具体的な回答では，*「他の仕事が激務過ぎる時期とかは，どうしてもおろそかになってしまいます」*や*「十分ではないのは，あまり大きな声では言えないですが，多忙感があるのと，生活指導，部活指導，教科指導とやっていくと，道徳指導の優先順位が後ろに来ているのかなという気がして」*等があった。

「道徳の時間が必ずしも道徳性を養うのに効果的とは思わない」とした具体的な回答では，*「正直に言うと，その道徳の時間が子供たちの道徳性を育むのにそんなに有効かと思うと，そうでない部分があって，結構，やはりコメントとかも書かせたりするんですけれども，やはりそれは，いいコメントをしようと思えば，子供たちはいいコメントができてしまうし，それが実際に子供たちが本当に，まあ，本当は引き出せなければいけないとは思うんですけれども，本当に思っていることかどうかは分からない部分があって，それよりも日ごろの生活の中で，例えば掃除をちゃんとやるだけじゃないですけれども，（中略）掃除をやるやらないだったり，委員会をやるやらないだったり，そういう実際に起こったことで生徒指導をしていく中で，道徳というのが身についていくのかなと。道徳の教材を読んでやるよりも，実際に起こったことを題材と言ったらあれですけれども，そういう機会を捉えてやっていくほうが，道徳性というのは本当の意味で身につくんじゃないのかなと思います」*等があった。

４－３．「道徳の時間」に対する忌避感情について

続いて，質問３（「道徳の時間」に対してどのような忌避感情があるか）への回答の分類を示したのが表５である。

表５　「『道徳の時間』に対してどのような忌避感情があるか（質問３）」の回答の分類

回答者	内容
B	教師の考えが生徒に与える影響が大きい
A	道徳の授業をしなくてよいならしたくない
D	道徳の授業があると考えると一日重い
C	教材を見て難しいと思った時

「道徳の時間」に対する忌避感情について質問をする際に，修身科等の影響によってこれまで道徳教育が忌避されてきた経緯を説明し，そのような感情の有無を尋ねている。これについては全ての回答者がそのような忌避感情はないとし，「道徳の時間」を何故避けたいかということについての回答が得られた。そのため協力者A，D，Cの回答は忌避感情とは少しニュアンスが異なったが，道徳の時間を避けたいとする率直な回答が得られたため，表では区別して記載している。

「教師の考えが生徒に与える影響が大きい」とした具体的な回答では，*「自分（教師）の考えというものが与える影響という部分に対しての意識としては，やはりあるところは。そこまで忌避感情と言えるぐらい大きいものがあるかというとあれなんですけれども，一大人の価値観として捉えられるのか，それとも，普段の授業の流れの中で彼らたちの中には道徳というのはあるので，そんなに真剣に道徳を受けていないようにも感じるところではあるんですけれども，結局，善悪の判断じゃないけれども，それは一般的な正解といわれるものはきっと道徳の中でも，とるべき行動だったり意見ということで，すごくとっぴな考え，偏った考えを伝えているつもりはないけれども，自分では自分の価値観の中で普通と，一般的と思っているところを言っていても，もしかしたらある点ではすごく自分が少数派の意見であって，少数派の偏った視点からのことを伝えてしまうかもしれない。自分としてはそこをなるべくフラットに伝えようと思っているつもりでも，やはり感じ取る部分は言葉のニュアンスだったりそういったもので，少なからず影響力というのはあるので，同じようにやっていても多分やっている人によって与えるものは違うだろうと思う時に，やはり自分の*

Akita University

人生経験であるとかそういう部分がすごく気になってしまう」等があった。

４－４．「道徳の時間」を充実させるためにどのようなことが大切と考えるか

最後に質問４（「道徳の時間」を充実させるためにどのようなことが大切と考えるか）への回答の分類を示したのが表６である。

表６　「『道徳の時間』を充実させるためにどのようなことが大切と考えるか（質問４）」の回答の分類

回答者	内容
A・C	活発に意見を言えるような学級づくり
B・D	教材研究

「活発に意見を言えるような学級づくり」についての具体的な回答として，「*子供たちが，やはりそれぞれの意見を持って発表できると活発になるのかなというのは思うんですね。だから，まずは自分の意見を発表できる雰囲気というのをつくることが大事かなと思います（中略）考えた意見をしっかりと発表できる雰囲気をつくることというのが大事かなと思います*」等があった。

「教材研究」の具体的な回答として，「*教材は研究しないとだめだよなっていうのは思いますね。（中略）やはり国語の授業に対して準備をしている時間のほうが圧倒的に多いわけだから，同じだけの時間をかければ道徳の部分での教材についてももっと生かせるものはあるんだろうなとは思うんですけれども，実際やってみようと思った時に，いつも止まってしまうんですよね，自分の中で*」等があった。

５．考察

「道徳の時間」に対する教師の苦手意識については，「話し合いを導きたい方向に持っていけない」ことや「教材の内容が生徒に深く考えさせられる内容になっていないから良い授業にならない」，「生徒が授業に真剣に取り組まない」ことに苦慮している回答が多くみられた。これらのことは，インタビューを通して回答者の多くから聞かれた「道徳は答え（正解）がないもの」という考えと関係があるものと考えられた。つまり，教師は「道徳の時間」は答え（正解）がないものと考えていることで，生徒の様々な発言にも答え（正解）はないものと考え，教師は生徒の発言を適切に取り入れながら授業を展開できず，それゆえに授業展開も教師が予想していた通りに進まない現状に苦慮していることが推察できた。

また「教材の内容が生徒に深く考えさせられる内容になっていないから良い授業にならない」という回答も多く見られ，教師が教材に依拠している現状があるように見受けられた。しかし，Bが「*そこは（教材の内容）スキルの問題だと思うんですけれども，自分自身でそこのところでなかなか上手くいかない時も多いので，そういった意味から苦手という意識がありますね*」と述べているように，教材自体が授業のねらいの内容を深められないことだけでなく，適切に教材を扱えない教師自身のスキルの問題と認識している教師もいた。年間計画で定められた計画を履行し，定められた時期に決められた教材を使用して授業することは，授業を実施するクラスの状況と合致しているとは限らない。教師はそのような場合に，生徒自身にどのようにして自分のこととして考えさせるのかを苦慮していることが垣間見られた。

田沼（2016）が述べるように，教師個々が自らの教育観に基づいて，本音で生徒たちに望ましい在り方や生き方を問いかける柔軟な授業環境にしていくことも必要であろうし，そのような授業実践を研修等を通して身に付けていくことが必要だと考えられる。

「道徳の時間」に対する軽視意識については，「道徳の時間への取り組みが他の教科・業務よりも優先順位が低い」とすべての協力者が回答していた。軽視意識について，教師から率直な回答が得られたものの，では何故，教師は「道徳の時間」に対して苦手意識を持っているにも関わらず，時間を割いて「道徳の時間」の準備をしないのであろうか。このことについて，Cは，「*答えを出すというところではない部分でいうと，何かこれを最低限教え込まなきゃいけないというノルマみたいなものは，目に見えてはないし，そもそも評価というものをつける必要はないというか，作業としてはないというか，そういう面でだと思います。責任感とか，任務みたいな意識が低いような気がします*」と述べている。

Akita University

しかし，教師個人がそのように考えていたとしても，組織として動いている一面から考えれば，教職経験の長いベテラン教師の道徳の授業や先輩教師の授業等を見て，自身の授業を反省し，改善していかざるをおえないと考えられる。そのことを確認するため，Cに対して「他の先生は道徳の授業を十分に行っているか」どうかを尋ねている。この質問にCは「思わない」と回答し，その理由を「*やっぱり（他の）先生自身の，何か上手くいかなかったなというようなニュアンスのつぶやきを聞いたことがあるのが一つと，あとは，今まで色々なたくさんの先生方の道徳を見てきても，やっぱり物語について意見を出させていって，何か答えがうやむやのまま終わってというノーマルスタイルというか，ありきたりなものは，とてもたくさん見てきたので，こんなにベテランの先生でもやっぱりこういうスタイルをとることもあるのかと思ったり，いろいろそういうところです*」と述べている。

Cの発言にあるように，回答者の多くは，他の教師も「道徳の時間」を十分に行っていないと認識しており，他の教師を見て，自分の道徳の授業をもっと向上させなければならないといった意識が低いように感じられ，教師個人の授業の向上を蔑ろにしてしまう要因になっていると推察された。またそのことが，教師全体の道徳の授業の向上に歯止めをかけてしまっている現状が推察された。

「道徳の時間」に対する教師の忌避感情については，学習指導要領に記載されているような歴史的な影響を受けて忌避するような感情は，今回の調査からは得られなかった。20代や30代の教師には，すでにそのような感情は薄いことが示唆された。しかし，先に述べたように教師全体として，他の教師も「道徳の時間」に十分に取り組んでいないと認識している現状があり，それらの雰囲気が「道徳の時間」が始まって，今日に至るまで続いてきていることが考えられるならば，修身科への反発によってもたらされてきた雰囲気が時代の変化として現在は薄れたものの，教師の道徳の時間に対する希薄な意識として残存している可能性が推察された。

「道徳の時間」を充実するために教師が大切だと考えていることとしては，教職経験年数が浅い教師は，「活発に意見を言えるような学級づくり」が大切だと考えていた。調査対象が少ないことから具体的なデータに欠けるものの，教職経験年数が浅い教師は，生徒が授業に真剣に取り組まないことも苦手意識として認識しており，教職経験年数が浅いことで，生徒の実態把握に難しさを感じ，それ故に授業の流れや構想が生徒の実情に合致せず苦手意識へとつながっている可能性も考えられた。

一方で，教職経験年数が約10年の教師は，生徒に関する発言は見られず，「教材研究」をすることが授業の充実につながると考えていることが分かった。

本稿では，今日に至るまで「道徳の時間」に対する教師の意識の改善が指摘されてきたにも関わらず改善されていない状況に鑑みて，これまで実施されてきた量的調査ではなく，教師へのインタビュー調査を通して，授業を実践する教師がどのように「道徳の時間」に対して取り組んでいるのか，その意識を探索的に調べてきた。

道徳の授業を実践している教師にインタビュー調査を実施することで，教師の本音を垣間見ることができた。今回の調査を通して，特に課題だと思われたことは，教師は「道徳の時間」に対して苦手意識を持っているものの，その苦手意識を克服しようと必ずしも意識的に考えていないことである。その原因になっているのが，教師の道徳軽視意識であると推察された。教師個人が自分の「道徳の時間」に苦手意識を抱いていると認識していながらも，他の教師も同様に「道徳の時間」に対して十分に取り組んでいないと認識している軽視意識の連鎖が，教師個人の指導技術の向上に歯止めをかけていることが示唆された。また本調査では推察の域を超えないのであるが，そのような環境が学校現場に構築され，それらが改善されていない背景には，「道徳の時間」が開始されてから今日に至るまで，教師が抱いていた苦手意識や軽視意識，忌避感情が複雑にからみあってきたためだと考えられた。今日の教師は，教科指導や部活動，また保護者対応や事務作業等極めて多忙である。このような教師の置かれている現状を詳細に把握し，その上でより有効的な施策を講じていくことが必要であろう。

本調査では，調査対象者数が少ないこと，調査

Akita University

対象地域が限られていることなど，調査から得られた結果は仮説の提示にとどまらざるをえない。今後は，調査対象数を増やすことや調査対象地域を広げること，調査対象年数の幅を広げること等を通して調査結果の客観性を高め，より教師の道徳教育への意識の真に迫る研究を進めていくことが必要であると考える。

謝辞

本研究を進めるにあたり，インタビュー調査にご協力頂いた先生方に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

1）中央教育審議会答申（2014）「道徳に係る教育課程の改善等について」
2）東京学芸大学総合的道徳教育プログラム推進本部（2014）「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査－道徳の時間への取組を中心として－」
3）横山利弘（2016）「道徳教育をつなぐ－これまでの道徳教育とこれからの道徳教育－」，『日本道徳教育学会第 87 回大会プログラム・発表要旨集』，16-17
4）吉澤祐一（2014）「中学校教師の道徳の時間に対する意識研究－修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる理論生成－」，『上廣道徳教育賞受賞論文集』22，293-306
5）田沼茂紀（2015）「『特別の教科道徳』が克服すべき課題とその解決方法の検討－道徳教育忌避感情および軽視傾向改善を中心に－」，『道徳と教育』第 333 号，145-152
6）荒木紀幸（1997）「『道徳の時間』の問題点と今後の課題」，『兵庫教育大学教科教育学会紀要』10，1-10
7）仁木茂雄・七條正典・田中雄三（1997）「『道徳の時間』に対する指導意欲に関する研究－小学校教師の意識調査を通して－」，『鳴門生徒指導研究』第 7 号，59-72